

フランシス・プーランクのピアノ曲

ユモレスク

1934 年に作曲され、ドイツ人ピアニストのワルター・ギーゼキングに献呈された。トッカータ風の軽快なパッセージと、突如として現れる叙情的な旋律がモザイク状に組み合わせられており、その名の通り、気まぐれでユーモラスな性格を持っている。

フランス組曲

ルネサンス期の作曲家クロード・ジェルヴェーズの舞曲を素材として、作家ブルデの劇『マルゴ王妃』の付随音楽の一部として作曲された。「ブルゴーニュのブランル」「パヴァーヌ」など 7 つの小品からなり、プーランクらしい明快さ、優雅さ、そして旋律への愛着が感じられる。

3 つのノヴェレッテ

「3 つのノヴェレッテ」の 3 曲の成立時期は異なるが、いずれも洗練さと親密さを兼ね備えている。「第 1 番 ハ長調」（1927）は、歌謡的な旋律と多調的な響きを持つ温和な曲想。「第 2 番 変ロ短調」（1928）は、スケルツォ風の軽快な曲。「第 3 番 ホ短調」（1959）は、マヌエル・デ・ファリャのバレエ音楽《恋は魔術》の主題を用いた作品で、晩年に追加された。

村人たち

「子供のための小品」という副題を持つ本作は「チロリアン」「スタッカート」など 6 曲からなる小組曲。「子供向け」とは言うものの、不協和音や故意に調子を外したような旋律など、アイロニー（皮肉）をふんだんに含んでいる。民謡風の素材をモダンな和声で処理しており、大人の視点から見た「子供の世界」と言える。

バレエ音楽《ジャンヌの扇》より 田園曲

ラヴェルやイベールら 10 人の作曲家が合作したバレエ音楽《ジャンヌの扇》（1927）の 1 曲として管弦楽版が作曲され、プーランク自身によりピアノ独奏用に編曲された。明快な旋律と愛らしい曲想から、アンコールピースとして演奏されることも多い。

3 つの小品 より トッカータ

トッカータは「3 つの小品」の終曲。バロック時代のトッカータ形式を踏襲しつつ、乾いたタッチと執拗な同音連打や跳躍進行を特徴とする。プーランクのピアノ曲の中でも高いヴィルトゥオジティを要する曲で、ウラディミール・ホロヴィッツが愛奏したことでも知られる。

即興曲 第 15 番《エディット・ピアフを讃えて》

全 15 曲からなる「即興曲」の最後を飾る 1 曲。シャンソン歌手エディット・ピアフへのオマージュであり、彼女の「歌」に通じる哀愁を帯びたメロディが魅惑的。初期の軽妙な即興曲とは一線を画し、ハ短調の重厚な和音と歌うような中間部を持つ、シリアスで感傷的な名曲である。

《ナゼルの夜会》

プーランクのピアノ作品のなかでも最大規模の楽曲。トゥーレーヌ地方のナゼルにある伯母の家で催された「夜会」に集まった友人たちの性格を変奏曲形式で描写している。「前奏曲」に始まり、「8 つの変奏曲」、「カデンツァ」を経て、「フィナーレ」に至る。古典的・伝統的な様式美とフランス的なエスプリ、そしてプーランクらしいウィットが詰まっている。